



夏の東北一周キャンプカーの旅  
出会いを求めた男の末路

古守  
精華堂



夏の東北一周キャンプカーの旅  
出会いを求めた男の末路

古守  
精華堂









## 目次

夏の東北一周キャンプカーの旅…出会いを求めた男の末路

一人目 ミカ

二人目 ひまり

三人目 あかね

エピソード

あとがき



# 夏の東北一周キャンプカーの旅…出会いを求めた男の末路

一人目 ミカ

七月の重たい熱気がアスファルトの照り返しと共に立ち昇り、視界を陽炎のように揺らしていた。

関越自動車道、三芳パーキングエリア。東京のコンクリートジャングルを脱出し、北への玄関口となるこの場所は、金曜日の夕方ということもあって独特の昂揚感と喧騒に包まれている。

家族連れの弾むような笑い声、休憩するトラック運転手たちの野太い話し声、重低音を響かせるエンジンのアイドリング音。そして何より、ここを行き交う人々が発する「どこか遠くへ行く」という、日常から切り離された浮足立った気配が、空気の密度をさらに高めているようだった。

その賑わいの中、俺——さとうけんいち佐藤健一は、まるで納車されたばかりのような眩い輝きを放つ、パールホワイトのワンボックスカーの運転席で、深く、長く息を吐き出した。

ハンドルを握る手は、じつとりと嫌な汗で湿っている。

この車は俺の所有物ではない。大手レンタカー会社で、清水の舞台から飛び降りる覚悟で契約したレンタル車両だ。ただのワンボックスではない。内装は豪華なキャンピング仕様にフルカスタムされた、いわゆる「バンコン」だ。

運転席の後ろには、木目調のテーブルセット、簡易キッチン、そして大人二人が余裕で寝転がれるフルフラットのベッド展開が可能なシートが広がっている。照明は暖色系のLEDで統一され、遮光カーテンを閉めれば、そこは外界と隔絶された走る秘密基地となる。

二十六歳。都内の中堅メーカーに勤務する社会人四年目。

真面目だけが取り柄で、無遅刻無欠勤。上司からは「使いやすい」と評価され、同僚からは「毒にも薬にもならない」と認識されている。

そして――女性経験、なし。

いわゆる「年齢イコール彼女いない歴」の魔法使い予備軍だ。

エアコンの送風口から吹き出す冷気でも、身体の奥底に燃える焦燥感という名の熱は冷やせない。

「……何やってんだろ、俺」

独り言が、高級車特有の優れた防音性能によって、車内に空虚に反響して消えた。

今回の東北一周、千五百キロの旅。会社は無理を言って取ったリフレッシュ休暇だ。表向きは「自分探しの旅」や「写真撮影」などと適当な理由をつけているが、心の奥底で期待していなかったと言えば、真っ赤な嘘になる。

旅先での運命的な出会い。予期せぬハプニング。あわよくば、この広い後部座席で繰り広げられる、ピンク色の展開。

アダルトビデオやネット小説で見たような、都合の良いシチュエーション。例えば、雨に濡れた美女を助けるとか、ヒッチハイカーとのロマンスとか。そんな妄想を抱いて、なけなしのボーナス

を叩いてこの城を借りたのだ。

だが、現実はどこまでも非情で、ドライだ。

練馬インターからここまで、俺の隣にある助手席はずっと空っぽのままである。シートに被せられたままの透明なビニールカバーが、光を反射してキラキラと輝いているのが、俺の孤独をあざ笑っているように見えてくる。

さっきトイレ休憩を済ませ、コンビニで買った微糖の缶コーヒーを煽った。人工的な甘さと苦味が喉を通り過ぎて、胸のつかえは取れない。

周囲を見渡せば、カップルや楽しそうな学生グループばかり。彼らの世界に、俺のような男の居場所はない。

もう行こう。このまま一人で走って、一人でコンビニ弁当を食って、一人で寝て、誰とも会話せずに帰ってくるんだ。それがお似合いだ。

諦めにも似た感情と共に、エンジンをかけようとキーに手を伸ばした、その時だった。

「ねえ、そこのお兄さん！ その車、中めっちゃ広そうじゃん？」

開け放たれた助手席の窓から、唐突に、脳髓を痺れさせるような甘ったるい声が飛び込んできた。

ビクリ、と心臓が跳ね上がる。恐る恐る視線を向けると、そこにはこの場の空気とは明らかに異質な、強烈な色彩を放つ存在が立っていた。



金髪に近い明るいアッシュブラウンの髪を、無造作に高い位置でお団子にまとめている。切れ長の目元を強調する派手なアイメイクに、耳元で揺れる大きなゴールドのフープピアス。

服装は更に刺激的だ。小麦色に日焼けした肩が大きく露出した白いオフショルダーのトップス。鎖骨のラインがくっきりと浮き出ている。下はショートパンツと呼ぶのも憚られるほど短い、切りっぱなしのデニム生地。そこから伸びる太ももは健康的で、夏の夕日を反射して眩しいほどに生々しい肉感を主張していた。

ギャルだ。俺が人生で最も関わりを持たず、生態系が異なると信じてきた、そして最も苦手とする人種。

「え、あ、は、はい……広いです、けど……」

喉が引きつり、裏返った声が出た。情けない。目を合わせることもすらできず、視線が泳ぐ。

同時に、脳内のどこかで歓喜の叫びが上がっていた。ついに来た。本当に、こんな漫画みたいな展開が俺の身に起きるのか？ 期待と恐怖が混ざり合い、指先がわずかに震える。

彼女は俺の動揺など意に介さず、値踏みするように、厚かましくも車内を覗き込んでくる。長いつまつげがバサリと音を立てて瞬き、彼女が身を乗り出すたびに、甘いココナッツとバニラが混ざったような濃厚な香水の匂いが、車内の無機質な空気を侵食した。

「やっぱそーだ！ これキャンピングカーってやつっしょ？ 超ウケる、こんなデカいのに一人で乗ってんの？」

「……まあ、はい。一人旅、なんで」

「ふーん。寂しーね。罰ゲーム？」

「ち、違いますよ。好きでやってるんです」

「あはは！ ムキになんないでよ。じゃあさ、アタシ乗せてってよ。新潟まで」

「は？」

思考が停止した。新潟？ ここから？

「ヒッチハイク中なの。友達とフェス行く約束してんだけどさー、寝坊しちゃうって置いてかれちゃったわけ。で、ここで粘ってんだけど全然捕まなくてー。この車なら寝れるし最高じゃん。お願い、乗せて！」

両手を合わせ、小首をかしげて懇願してくる。その仕草のすべてが計算されたようにあざとい。

断るべきだ、と理性が激しく警鐘を鳴らす。見ず知らずの、しかもこんな派手で奔放そうな女性を密室に乗せるなんてリスクが高すぎる。美人局かもしれないし、何かのトラブルに巻き込まれるかもしれない。

だが、俺の視線は意思に反して、彼女が窓枠にかけた腕の、白く滑らかな内側の肌や、身を乗り出すたびにチラつく豊かな胸の谷間に釘付けになっていた。

これはチャンスなのだ。この城を借りるために支払った高額なレンタル料は、まさにこの瞬間のためにあったのではないか。理性が鳴らす警鐘は、加速する期待の轟音にかき消されていく。

心臓の鼓動が早くなる。もし断れば、俺は再び孤独なドライブに戻るだけだ。もし受け入れれば、この旅は劇的に変わるかもしれない。

男としての本能と、長年蓄積された下心が、理性をねじ伏せた。

「……いい、いい、ですよ。新潟までなら、どうせ通り道ですし」

「マジ？ やった！ お兄さん神じゃん！」

彼女は歓声を上げると、俺の返事も待たずに助手席のドアを開け、軽快に乗り込んできた。

ドスン、とシートが沈む。これまで空気がか乗せていなかった俺の聖域に、圧倒的な「異性」の質量と熱量が割り込んでくる。

「アタシ、美嘉<sup>みか</sup>。ミカって呼んでいいよ。お兄さんは？」

「……健一」

「ケンイチ君だね。よろしくー！」

初対面の、しかも六歳以上は年上であろう相手に向かって君付け。敬語なし。その容赦のない距離感の詰め方に、俺は軽い目眩を覚えた。

エンジンをかけ、震える手でシフトレバーを握り、車をゆっくりと本線へ向かわせる。だが、俺の心臓の回転数はレッドゾーンに突入したまま、落ち着く気配がなかった。

高速道路を走り始めて三十分が経過した。

車内は、奇妙な緊張感と、一方的な弛緩に満ちていた。

ミカは、まるで自分の部屋のようにくつろいでいた。助手席で厚底のサンダルを脱ぎ、ダッシュボードに行儀悪く足を投げ出している。

「あー、マジ涼しー。外地獄だったし生き返るわー」

行儀が悪いと注意すべきなのだろうが、その足があまりに無防備で、艶めかしくて、俺は何も言えなかった。

ショートパンツの裾が重力でめくれ上がり、普段なら絶対に見えない太ももの裏側の、柔らかさそうな白い肉が見え隠れする。

高速道路の街灯のオレンジ色の光が、一定のリズムで車内を照らすたびに、その白い肌が闇の中に妖しく浮かび上がり、俺の視界の端を焼き焦がす。視線を逸らそうと努力すればするほど、意識はその一点に集中してしまう。

「ケンイチ君さー、彼女いんの？」

スマホでSNSをチェックしながら、ミカが何気なく、しかし急所を突く質問を投げてきた。一番触れられたくない核心。俺はハンドルを握る手に力を込め、精一杯の平静を装う。

「……今は、いないかな。仕事、忙しいし」

「ふーん。『今は』ね。よくある言い訳。じゃあ経験はあるんだ？」

「えっ」

ドクン、と心臓が大きく鳴った。

ここで「ない」と言えば完全に舐められる。

「ある」と嘘をつけば、詳細を聞かれた時にボロが出る。沈黙は肯定と取られるか、否定と取られるか。思考が空回りする。

俺の葛藤を見透かしたように、ミカがスマホを置いてこちらを向いた。その瞳は、暗がりの中でも獲物を見つけた猫のように鋭く、楽しげに細められている。

「あ、その反応。図星？　もしかして……チェリー？」

「ち、違いますよ！　失礼だな、初対面でそんなこと」

「えー、マジで？　顔真っ赤だよ？　ウケるんだけど」

ケラケラと笑う声が、狭い車内に反響する。悪意があるわけではないのだろう。ただ、彼女にとって俺の純潔など、道端の石ころ程度に軽い話題であり、格好の暇つぶしのネタなのだ。

羞恥心で耳まで熱くなるのがわかる。二十六歳にもなつて、一回り近く年下のギャルに童貞を見抜かれ、笑われる。この豪華なバンコンという城の中で、俺は王様ではなく、ただの道化だった。

「……笑うことないだろ」

「ごめんごめん。でもさ、ケンイチ君ってなんか可愛いね。いじり甲斐があるっていうか、反応がいちいちピュアで面白い」

ミカが身を乗り出し、運転席の俺の顔を覗き込んでくる。

近い。吐息がかかる距離だ。甘い香りが濃厚になり、俺の脳を麻痺させる。彼女の胸元の膨らみが、視界の端で揺れている。

「ねえ、もっかい休憩しよ？　アタシ、なんか喉乾いたし、トイレも行きたい」

「さっき三芳出たばかりだぞ。次はまだ先……」

「いーじゃん。漏れちゃうよ？　次のパーキング入ってよ。ね？　ケンイチくん」

甘えるような上目遣いで、名前を呼ばれる。その響きに含まれる微かな支配の色に、俺は抗うことができなかった。

俺は従順な下僕のように、次の小さなパーキングエリアへの誘導路へと、ウインカーを出してハンドルを切った。

少し進んだ先の、施設も何もない小規模なPAに入った頃には、日は落ち、辺りは薄暗くなっていた。

大型トラックが数台、エンジンの音を立てて停まっているだけで、乗用車のエリアは閑散としていた。自動販売機の明かりだけが、佻しく地面を照らしている。

俺はミカの指示に従い、本館やトイレから離れた、外灯の光が届かない植え込みと木立のそばのスペースに車を停めた。

「ここなら静かだし、誰も来ないね」

エンジンを切ると、不気味なほどの静寂が訪れる。草むらから聞こえる虫の音がうるさいほどに響く中、ミカの声だけが妙に艶っぽく、耳に残った。

「……トイレ、行くんじゃないのか？」

「んー、それは嘘」

ミカは悪戯っぽく舌を出して笑うと、カチリ、という金属音を響かせてシートベルトを外した。その音が、何かの一線を越える合図のように聞こえた。

「ケンイチ君さ、乗せてくれてありがとね。アタシ、お金ないからお礼できないんだけど……」



彼女が座席の上で膝立ちになり、センターコンソールを乗り越えて身を乗り出してくる。

顔が近い。暗闇に慣れた目で、彼女の瞳の中に、恐怖と期待で歪んだ俺の情けない顔が映っているのが見えた。

「身体で払う、とか言ったら……喜ぶ？」

頭の中で何かが弾け飛んだ。

心臓が肋骨を砕きそうなほど激しく脈打つ。A Vで見た展開だ。妄想していたシチュエーションだ。まさか現実には、こんなことが起こるなんて。

期待で一気に膨れ上がった俺の股間が、ズボン越しに硬く、痛いほどに主張を始める。それを隠そうと身を縮めるが、ミカの鋭い視線は的確にそこを捉えていた。

「あは、すご。もう元氣じゃん。わっかりやすい」

ミカの手が伸びてくる。細く、派手なネイルアートで飾られた指先が、俺の太ももに触れた。

ピクン、と身体が跳ねる。電流が走ったような衝撃。ジーンズ越しなのに、その指の熱が直接肌に伝わってくるようだ。

「ちょ、待つ……心の準備が……」

「準備なんていらないでしょ？ お礼の前払い、してあげる。ケンイチ君、チェリーなんでしょ？」

お姉さんが優しく遊んであげる

「遊ぶって、そんな……俺は……」

「いーから。車降りて。ここじゃ狭いし、外の空気吸いながらの方が気持ちいいよ」

過去作品のIF／続編／前日譚  
あなたオリジナルの妄想まで

pixivにてリクエスト受付中



お兄さん

お会いしましょうね

次の作品でも



最新情報をBlueSkyで発信中

@komoriseikado.bsky.socialをフォロー

支援者向けに先行／限定作品を公開中

